

公開講演会要旨

軒瓦製作技法に関する二三の問題—川原寺の瓦を中心として— 川原寺には、「川原寺式」の名で呼ばれる様式的にほぼ同一の4種類の創建軒丸瓦がある。この軒丸瓦の裏面の製作技法を分析することによって、4種類の瓦はほぼ同時期に製作を開始したこと、しかし製作を終えた時期は種類によって差があることを明らかにした。この軒丸瓦の「同範関係」は、のちの藤原宮式や平城宮式軒瓦の分布の原型をなすことが指摘できるとともに、先の知見をもとに考えると、なかでも近江にいたる山城ルートが特に重視されたことがわかる。これは壬申の乱直後という政治状勢を背景におくと、川原寺造営主体者の意志を具体的に示したものと解釈することができる。

(金子 裕之)

東大寺文書の起請文について 文書目録作成のために調査を実施しているいわゆる東大寺未成巻文書には、起請文が300通以上まとめて収められており、それらを素材として、東大寺文書にみられる起請文を概観・紹介した。鎌倉初期にはふつうの縦紙に認められていた起請文は、中期になると次第に牛王紙を翻して書くものもあらわれるようになり、東大寺文書では鎌倉後期から南北朝期にかけての牛王紙が多く残っている。牛王紙の種類は、未成巻文書では、版刷のもの10種、墨書したものの23種の、あわせて33種みられ、その多くに中央に横折目が残っている。また二月堂牛王紙の刷り方やその貼り付け方等具体的な使われ方、また落書起請文の切封の存在など、スライド等を使って説明した。

(綾村 宏)

C. Thomsen の業績について C. Thomsen は、三時代区分法の提唱者として、考古学史上にその名があげられる。しかし、その業績は、近代考古学の発達に大きな役割を果たしたこの時代区分法以外は、ほとんど知られていない。だが彼の仕事は、これのみにとどまるものではない。歴史学の一分野としての考古学の役割と可能性を明確に捉え、その方法論にも見通しを与え、さらに遺跡保護の重要性を認識するのみでなく、実際の仕事としてこれにとり組んでいる。1836年にデンマークの北歐古代学協会から刊行された「北歐古代文化の手引き」のなかのThomsenの著述を手掛りとして、何故、当時文化の中心地とは言えなかったスカンジナビアの小国で、近代考古学の基礎が形づくられたのかを考えてみた。

(岩本 圭輔)

平城京と京東条里 条坊と条里の先後関係論争における問題点の摘出、大縮尺図による条里の復原、座標読取装置による条里坪界交点の計測、平城宮跡附近大縮尺図による1町106m方眼の実験的線引き、などの作業の結果、条里の北および西の起点の確認、能登・岩井両河川の流路の変更とその影響、坪の一边長は102.37~121.52mのばらつきをみるが、平均は108.70(E-W)、108.65(N-S)となること、条坊にのらない海龍王寺の寺地と伽藍配置は一边106mの古地割にのり、法華寺のプランとも相関すること、計画地割の遺存であろうが、平城宮跡の調査遺構と地形観察からも、同様の地割が看取し得ること、従ってこうした地割の上に条坊の設定と現京東条里の整備があったと推論した。

(岩本 次郎)